

第6章

「帯広の森」のこれから



造成開始から50年を経過した今、これまでの森づくりを振り返り、これからどのように森を育てていくのか、利活用を促進していくのかを考えていく。

1. 帯広の森の目指す姿

はじめに、帯広の森の目指す姿について確認する。

帯広の森のバイブルである造成計画書の冒頭には、こんな一節がある。

「マチをぬけると森がある。どの道を行っても十勝特有の樹々が私達を迎え入れてくれる。そこでは、小鳥達がさえずり、虫の羽音が聞こえてくる。緑深い森の中には、広場や花園、さまざまな運動施設がほどよく配置され、記念樹林、果樹園、市民菜園などがある。市民のだれもが緑と太陽につつまれ、家族そろって楽しい一日を過ごす。」

ここから読み取れる目指す森は、育成された森の中で、整備された施設を、利活用しながら楽しい一日を過ごす人々の姿である。

2. 帯広の森の現状と課題

帯広の森の目指す姿を踏まえ、その要点となる「育成」「施設整備」「利活用」の3点について、現状と課題を整理するほか、森づくりに欠かせない「森と人」との関わりについて確認していく。

(1) 森の育成

目指す森は、カシワ・ミズナラ林、エゾマツ・トドマツ林、ハルニレ林、ヤチダモ・ハンノキ林、ヤナギ林、アカエゾマツ林などの郷土樹種を主体とする森林である。

現在、森のステージプランでは育成期から森林形成期に位置している。植樹の際の苗木調達などにより必ずしも目標とする樹種を植えることができなかったため、その際に植樹したチョウセンゴヨウなどの外来種が広がり、管理に労力を費やしている。

また、自然林に接する植樹林において、在来種の広がりが少ない状況にあるなど、自然林とのつながりに課題があるものの、現状、樹木は概ね順調に成

長し、林冠が形成され、森林らしい景観となっている。林床は、植樹当初の牧草種による草原的な植生から森林性の植生へ移行しつつあり、イチヤクソウ類などが生育するようになった。また、キビタキ、ヤブサメなどの森林性の鳥類も見られるようになってきている。

今後も、目指す森の姿を意識しながら、競合樹種の伐採や外来種の侵入拡大を防止するなど、人的な誘導が必要であり、森の育成に関するモニタリングを行いながら、森づくりガイドラインにある3つの森林タイプや植樹区ごとの林型の特徴にあった間伐等に加え、林床管理や危険木除去などのきめ細かな育成管理が必要である。

(2) 森の施設整備

造成計画書では、帯広の森を8つのブロックに分け、それぞれの森の性格に応じた施設整備を行うことになっている。

現状は、冬期国体開催の関係もあり、早くから各種体育施設の整備が進み、平成22年に待望の森の育成管理・利活用の拠点施設として、帯広の森はぐく一むが整備された。このほか、森の交流館、JICA北海道センター、パークゴルフ場、もりの山などが整備され、もりの山から東側の園路やトイレ等の基盤施設も整備された。

今後、森の成長に合わせてもりの山付近から西側に延びる園路やトイレなどの基盤となる施設の整備が必要である。一方で、造成計画書にある緑化植物園、文化センター、大池、キャンプ場、果樹林等の施設は、当面、整備は難しいが、時代の変化を踏まえた利便施設等の整備を検討していく必要がある。

(3) 森の利活用

最も整備が進んでいる体育施設は、多くの方に利用されている。園路やトイレ等の整備が進むにつれ、散歩やジョギング、クロスカントリースキーといった日常的な利用者が増加しているほか、森の成長により自然を身近に感じられる環境となったことで、昆虫や野鳥などの自然観察を行う人が見られるよう

になってきている。また、はぐくむを中心に様々なイベントや行事が実施され、令和5年度の来館者総数は過去最高の17,186人となるなど、利用が広がってきている。

このほか、動植物の調査研究の場としての利用もされているところである。

今後も、日常的な利用はもとより、森をフィールドとした多様な利用が広がるような取り組みのほか、果実や間伐材などの原則禁止となっている森の恵みの活用に向けてルールの柔軟化等も必要である。

(4) 森と人（企業・団体含む）との関わり

森づくりと市民との関わりとして誰もが思い浮かぶのが市民植樹祭と市民育樹祭である。市民植樹祭では、延べ148,500人の市民が30年に渡り約225,000本を植樹してきたほか、森の健全な成長に必要な間伐や下枝払い等の作業を行う市民育樹祭も15回にわたり開催され、延べ13,000人の市民が参加した。なお、これらを主催した実行委員会は、若手主体の市民運動から発展したものである。

平成16年に市民植樹祭、平成17年に市民育樹祭を終えた後も、小規模な植樹や育樹などは継続され、その後は、市民団体などによる育成や利活用が始められ、現在は8団体により森づくり活動が行われている。

現状では、植樹祭のように発信力があり、多くの市民が集まる大規模なイベントはなく、森への関心

が薄い市民の関与が限定的となっている。その一方で近年は、学生や親子などによる活動が主体の団体や身近で自然に接することに魅力とを感じる会員が増加している団体もあり、このように市民の関わりの裾野が広がっていくことが重要である。また、継続的に活動が続けている市民団体の会員の高齢化や減少が見込まれることから、森づくり活動に参加する人材の確保や知見の継承、企業の地域貢献活動などとの連携が必要である。

3. 森に求められる役割や機能の変化

ここでは、帯広の森の構想段階から現在に至るまでの社会環境の変化と、帯広の森に求められる役割や機能がどのように変化しているのかを確認していく。

社会環境の変化は、造成以前から、継続的に策定されている全国総合開発計画（現国土形成計画）における社会背景を調べた。（表1）

吉村市長が帯広の森構想の原点となった「ウィーンの森」に出会った昭和44年に策定された新全国総合開発計画では、高度経済成長、人口や産業の大都市への集中、情報化・技術革新の進展が背景となっているが、直近の2つの計画では急激な人口減少や少子化、異次元の高齢化、インフラの老朽化のほか、ライフスタイルの多様化や働き方の変化などが背景として示されており、社会環境が大きく変化していることがわかる。

表1 全国総合開発計画（現国土形成計画）の変遷

	新全国総合開発計画(新全総)	第二次国土形成計画(全国計画)	第三次国土形成計画(全国計画)
閣議決定	昭和44年(1969年)	平成27年(2015年)	令和5年(2023年)
背 景	1. 高度経済成長 2. 人口、産業の大都市集中 3. 情報化、国際化、技術革新の進展	1. 国土を取り巻く時代の潮流と課題(急激な人口減少・少子化、異次元の高齢化、巨大災害の切迫、インフラの老朽化等) 2. 国民の価値観の変化(ライフスタイルの多様化、安全・安心に対する国民意識の高まり) 3. 国土空間の変化(低・未利用地、空き家の増加等)	「時代の重大な岐路に立つ国土」 1. 地域の持続性、安全・安心を脅かすリスクの高まり(未曾有の人口減少、少子高齢化、巨大災害リスク、気候危機) 2. コロナ禍を経た暮らし方・働き方の変化(新たな地方・田園回帰の動き) 3. 激動する世界の中での日本の立ち位置の変化

また、公害白書（現環境白書）でのキーワードの変遷を見てみると、造成当初の昭和54年以前では、公害、騒音、公害防止、大気汚染、水質汚濁といった公害に関するキーワードが多かったが、令和2年以降は廃棄物、生物多様性、気候変動、持続可能、循環といった地球温暖化やゼロカーボンに関するキーワードが多く出現している。

公害白書（現環境白書）におけるキーワードの変遷

順位	昭和54年(1979年)以前	令和2年(2020年)以降
1	公害	廃棄物
2	騒音	生物多様性
3	公害防止	気候変動
4	大気汚染	持続可能
5	水質汚濁	循環
6	環境基準	温室効果ガス・GHG
7	自然環境	生態系
8	排水	温暖化
9	廃棄物	化学物質
10	汚濁	脱炭素

ここまで国の計画等を参考に社会環境の変化を考察してきたが、最後に帯広市が令和2年に策定した第2次みどりの基本計画に記載している社会情勢の変化を掲載する。これは当然、帯広の森にもあてはまるものである。

第2次みどりの基本計画における社会情勢の変化

少子高齢化や人口減少の進行、価値観の多様化、地球環境問題など、様々な社会的課題がある中で、みどりは、温室効果ガスの吸収など環境面に資する機能、健康活動の場やコミュニティ醸成の場など社会面に資する機能、観光振興など経済面に資する機能など、多様な機能を有していることから、こうした機能をまちづくりに活かしていくことなどが期待されています。

これらを踏まえて、帯広の森に求められる役割や機能について再確認していく。

造成計画書では、帯広の森の役割や機能として、安らぎ、快適さ、豊かさなどの緑の固有効果や人間性回復の場、余暇活動の場、自然再生などを想定していた。現在においても、緑の固有効果などに大きな変化はなく、価値観やライフスタイルが多様化し、生物多様性の確保が課題となる中、これらの役割や

機能は、これから、ますます必要性が増していくものと考えられる。

一方、造成当初に想定していた公害緩和については、CO₂吸収源や気候変動への対応と変化し、グリーンベルトとしての機能であった市街地の拡散防止は、人口減少等の影響により、必要性が低下していくものと考えられる。

4. アンケートとシンポジウムから得られたもの

今年度実施した市民へのアンケートやシンポジウムを基に、現在地の確認とこれからの森づくりの参考としたい。

(1) アンケート

帯広の森を知っていると答えた人は93%となっており、認知度はあるものの、知っている順は、体育施設、はぐくむ、市民の森となり、体育施設としてのイメージが強く、拠点施設がその次という結果となった。

現在の帯広の森の満足度の設問では57%の人が満足・やや満足としており、32%の人が普通、やや不満・不満と答えた人は11%であった。不満と答えた理由としては、距離的な問題、交通の便が少ないことや帯広の森の情報が少ないこと、散策路の整備や森の手入れ不足などが挙げられた。

帯広の森でこれからどの様に過ごせたら楽しいか、やってみたいかの設問では、家族で飲食を楽しむ、時間を気にせずゆっくり過ごす、大人と子供と一緒に遊べるなどがあり、そのために必要なものとして、休憩スポット、カフェ、レストラン、キャンプ場、遊具などが挙げられていた。

(2) 50周年記念シンポジウム

シンポジウムの基調講演では、有識者から「帯広の森が成功したのは、強い理念のもと戦略的な計画があったことが重要であり、これからは、世界に誇るグリーンインフラとして、市民らが工夫して繋いできた帯広独自の財産として発信すべきである。」など、森づくりに対する評価と提言があった。

続いて行われたパネルディスカッションでは、「親世代が子どもたちと共に自然の中で遊ぶ姿勢を持つことが、世代を超えた交流を生み、子どもたちに自然への愛着を育む要因となる。」「グリーンベルトか

らまちの中へくさびとなるみどり（緑地）を展開することで、生活と緑の関係性が構築される。」「まちのプライド、シンボルとして、100年後の森は帯広の文化を写し出す鏡である。」などの未来への提言があった。

また、基調講演の前に実施したワークショップでは、これからの提案として、情報発信の強化、トイレやベンチの増設、フェス会場やキャンプ場、地域の高校生が主体となったボランティア活動の促進、暗さを利用した星空観察やサバイバルゲームの開催、バスなど公共交通の整備などが挙げられた。

5. 現在地の確認と方向性

冒頭で述べたように、帯広の森で一日楽しく過ごす（利活用が進む）ためには、十勝特有の樹々や動植物が住む緑深い森を育成し、その中に程よく様々な施設が整備されていることが必要となるが、50年を経過してそうした森になったのか、また、100年に向けてどのような方向で森づくりを進めればよいのかを、市民と森との関わりの変化や社会環境の変化も踏まえて考えていく。

(1) 森の育成

現在、概ね、育林期から森林形成期に相応しい森林としての成長がみられる。これからも、森づくりガイドラインに則した間伐や補植などによる目標とする林型への誘導や林床の管理、外来種対策など、必要なモニタリングと適切な手入れをすることで、理想とする森に近づけることが可能になると考えられる。

ただし、年月の経過とともに、当初から森に関わってきた人の関与は低くならざるを得ず、人口も減少していく中で、森の育成管理に関わる技術の継承や情報の共有、作業に関わる担い手の確保が必要である。また、危険木の除去等の継続的な安全対策も求められる。

(2) 森の施設整備

体育施設群の整備に加え、森の育成・管理と利活用の拠点となるはぐく一むが整備されたほか、もりの山以东まで園路やトイレなどが整備されている。

これからも、安全安心に利用できるよう、既存施設の維持管理を行いながら、園路やトイレなどの基

盤整備を順次進めていくほか、目指す森の姿の実現に向けて憩いや遊び、食を楽しむといった利便施設などの整備が求められてくる。

ただし、公共施設の整備を抑制せざるを得ない社会環境の中、造成計画にある多様な施設の整備は難しく、利便施設の整備にあたっては、Park-PFIなど公民連携の手法を模索しながら取り組む必要がある。

(3) 森の利活用

森の利活用は、森の育成や施設の整備に比例して利用が増加する傾向があり、現在は、整備が最も整っている体育施設群の利用が多くを占めているが、森が成長してきたことで、従来からの園路の利用に加え、森をフィールドとして利用する市民が増加してきているほか、はぐく一むでのイベントや行事等により、森を訪れる人が増加している。新たな公共投資が容易ではなく、緑の多面的な効能に関心が高まる中にあるのは、森のフィールドとしての利活用をより一層進めていくことが必要である。

ただし、前述のとおり、利活用にあたっては一定の施設整備が必要であるほか、利活用を進めるために効果的な情報発信や新たな仕掛けが不可欠である。また、親子又は子供たちが安心して楽しく利用できる環境を整えることが大切であり、森に負担がかからない範囲でルールを柔軟化を進めていくことも必要となってくる。

森の「育成」「施設整備」「利活用」は相互に関係しており、森を楽しむ人が増えることで、森を守り育てる意識の醸成が進み、育成にも関わる人が増えることが期待され、企業等による関心も高まり、施設整備にも好影響を与える可能性がある。

また、帯広の森が帯広市の緑のネットワークの核であることも踏まえ、国立公園である日高山脈や大雪山系から流れる十勝川や札内川の緑地のほか、緑ヶ丘公園をはじめとする市街地の公園や緑地と連携することで、市民の豊かな暮らしや帯広市のイメージ向上につなげていく必要がある。

6. 帯広の森の価値（効能）

造成時に描いていた帯広の森を目指していくには、前述のとおり、「育成」「施設整備」「利活用」のそれぞれの取り組みが必要であり、そうした取り組みを

進めるうえで欠かせない共有すべき認識として、帯広の森の価値（効能）について、改めて整理する。

造成時に掲げていた理念は、利活用計画書によると「自然と人間の共生」「地域自立の象徴」「森は歴史的、文化的、自然的存在」である。

これまで検証してきたように、造成時に掲げてきたこれらの理念は今なお色あせることなく、むしろ、重要性を増してきている。

ただし、高度成長から低成長へ、公害対策から気候変動対策へなど社会環境が変化し、少子高齢化や人間関係の希薄化、社会のあらゆる面での多様化が進む今日において、現代から未来へとつながる道標として、これからの時代に即した言葉を提示したい。

先ほど、「利活用」を進めるために必要な事項として、「情報発信」や「新たな仕掛け」が重要となってくると述べたが、帯広の森の価値（すごさ）を発信（アピール）することで、森への関心を高めることにつながり、後述する様々な仕掛けにも効果を発揮すると考えられる。そのターゲットとしては、第一に市内の住民や団体・事業者、次に市外の住民や事業者、ひいては世界に発信していくものであり、そうした観点も含めて、次の3点が重要と考える。

●シビックプライド^{※1}～まちづくりの象徴～

市民が木を植えて森を造ってきた歴史と市民が継続して森を育てていることがシビックプライドへとつながり、まちづくりの象徴となる帯広の森

- ・原野から苦勞して開墾した畑を市民の手により植樹して森に戻す構想を具現化
- ・多くの市民や森づくり活動団体による維持管理・運営が継続されている市民の財産

●グリーンインフラ^{※2}～地球にやさしい～

動植物の生息環境の保全、気候変動にも対応するグリーンインフラである、地球にやさしい帯広の森

- ・生物多様性に貢献（ネイチャーポジティブ）
- ・カーボンニュートラルに貢献
- ・日高山脈からつながるみどりのネットワークの核

●ウェルビーイング^{※3}～人にやさしい～

家族や友人と過ごせる場として、生活の一部としてウェルビーイングを感じられる、人にやさしい帯広の森

- ・みどりの持つ憩いや癒しの効果を実感できる場

- ・心豊かな生活を支えるサードプレイス^{※4}
- ・食や健康、スポーツや環境学習の場
- ・誰もが日常的に利用できるインクルーシブ^{※5}な公園

用語解説

- ※1 地域に対して市民が誇りや愛着をもち、自ら地域をより良くしていこうとする気持ち。
- ※2 自然環境が有する機能を様々な課題解決に活用し持続可能な地域づくりを目指す考え方。
- ※3 個人や社会のよい状態、本質的に価値のある状態、健康と同じように日常生活の一要素であり社会的、経済的、環境的な状況により決定された状態
- ※4 自宅や学校、職場とは別にある居心地の良い第3の場所。
- ※5 多様な属性やニーズを受け入れる、様々な背景を持つ人が排除されない状態

7. 利活用の進め方

これまでの50年間の森づくりを振り返り、現在地の確認と帯広の森の方向性や価値を整理してきた。これらを踏まえ、これからの帯広の森の利活用の進め方を考えていく。

帯広の森では、過去には市民植樹祭などの大規模なイベントにより市民が集い森をつくっていた。現在は、大規模なイベントはないが、個人での利用は増加し、市民団体による森づくり活動が継続しているなど、森と人との関わりが変化している。森の目指す姿の実現に向けては、これからも人が森と関わっていくことが必須である。

そのための森と人との関わり方の手順として、【森を知る→森に来る→森に通う→森で活動する→森を伝える→】を基本として取り組んでいく。

森を知ってもらい、来てもらうことを発端に、何度も森に訪れ、通うようになる。通い続けているうちに仲間ができ、森への活動へと関わりを深めていくことで、人と森、人と人とのつながりが深化し、さらに新たな人を呼び込むなど、人の活動が拡大することにつながる。

こうした森と人との関係性を構築しながら、利活用を促進するための取り組みをイメージし、3つの柱を掲げた。

- 森に関わる機会を広げる（森との接点をつくり、安全安心なインフラを築く）
- 森に関わる仲間を増やす（森の価値を高める関係性をつくる）
- 森に関わる人を引き込む（森の価値を伝える人をつくる）

こうした取り組みの柱のもと、多くの市民が森に関わる仕掛けとして50周年事業で製作した絵本や記念誌を使った情報発信のほか、間伐材を活用した玩具などのきっかけづくりとなるイベント、公民連携の検討などの利活用の促進を図りながら、その基盤となる森の育成管理や園路などの施設整備に取り組んでいく。

8.「帯広の森」のこれから

造成から100年を迎えた帯広の森をイメージして、第1回植樹祭の日に生まれた、ある帯広市民を主人公とした物語をつくりました。

皆さんは、百年の計「帯広の森」にどんな夢を描きますか。

ある市民の物語 ー帯広の森に出会ってー

プロローグ

70歳で定年してからは、毎日のように帯広の森に来ている。そして、誕生日は、「もりの山」に登り、日高山脈や帯広の街なみを眺めながら、記念写真を撮るのを楽しみにしてきた。

年によっては、台風のような強い風が吹く日や大雨が降る日もあった。季節外れの真夏日も3回あった。ゼロカーボン20年以前に達成されているのに、地球温暖化の影響は暫く続くようだ。

たいていは、妻と二人だが、米寿のときには、孫を連れた息子夫婦と一緒に来た。100歳の誕生日の今日は、ひ孫も一緒に総勢18人で登りにきている。今日は、妻の体調も良いので、みんなで一日中森で過ごすつもりだ。こんな楽しい思い出づくりをあと何年続けられるのだろうか。もう少しで、ひひ孫も生まれるらしい。あと、1年でも2年でもいいからできるだけ続けたい。このふるさとの森で過ごす大切な一日を……。

思い返せば、50年前が転機だったのかもしれない。人生100年時代と言われ始めてから数年後、

100年の計と呼ばれる帯広の森が造成から50年を迎えた。僕は、帯広の森に関わっている友人から頼まれ、これからの森について考えた。

生い立ち

僕の人生は、森と運命づけられていた。僕が生まれたのは、1975年6月1日。第1回市民植樹祭が行われた日だ。僕の父親は、町内会の役員をしていて、その日の未明に僕が生まれたのを見届けた後、木を植えに行った。後日、僕の生誕記念の標柱を手作りし、父が植えた木の傍に立ててきたと聞いた。

僕が初めて木を植えたのは、小学4年生の時だ。3歳年下の妹も連れて家族で植樹祭に行った。音楽のイベントもあって、みんな楽しそうにしていたのを覚えているし、上級生がカウボーイのような服を着て、カッコいいと思った。



翌年、僕は「森の少年隊」に入隊した。普段、通っている学校の子とは異なる友達や上級生たちと一緒に遊ぶのは新鮮だった。どんぐりを拾って苗を育てたり、木を植えたり、巣箱をかけたり、川で遊んでキャンプもした。充実した2年間だったし、家でテレビを見ているより遥かに楽しかった。ジュニアリーダーにならないかと誘われて迷ったけれど、中学からは、大好きだった野球に専念することにした。

それから部活が無いときは、両親や妹と植樹祭に行き、育樹祭にも参加した。父は、はっきりとは言わなかったが、第1回目に父が植えた木は、育ちが悪かったらしく、枯れたのか、間伐されたのか、無くなっていたようだった。

そして、その場所に残っていた標柱も土に埋もれ朽ちかけていた。少し残念な気持ちもあったけど、これも森をつくっていく過程の一つなんだろうと思ったのを覚えている。

僕は、高校3年生のときに、帯広の森野球場で3試合戦った。北北海道大会には行けなかったけれども、決勝まで仲間たちと勝ち進んだ暑い夏の一週間は、僕の人生のハイライトの一つだと思っている。

高校卒業後は、一浪してから進学のために上京し、そのまま、都内の会社に勤めた。将来を共にしたいと思える彼女と出会い、東京での定住を考えていた矢先、父が病気で倒れ、久しぶりに故郷に帰った。

父は思いのほか衰弱していたが、窓から見える外の景色を眺めながら、孫と一緒に森で遊ぶまでは死ねないなあと僕に言って微笑んだ。でも、その3日後に、父は帰らぬ人となった。

告別式が終わって、十数年ぶりに帯広の森に行った。そして、驚いた。木が大きくなり、部分的に森らしくなっている。球技場など体育施設の整備も更に進んでいた。母の事が心配だったこともあるけれど、何よりも自分の子どもをここで育てたいと思った。僕は、隣で歩いていた彼女に思いを打ち明けた。彼女は目を潤ませながら静かにうなずいてくれた。

1年後、僕は妻と帯広に移り住み、実家の傍の帯広の森の近くに家を建てた。子どもも二人授かった。都会で生まれ育った妻は、事あるごとにこの環境を褒め称える。こんな贅沢なところはほかに無いよと。しかも自分たちで造ったなんて凄いことだよと。

僕も高校生までは、地元の街のことを田舎町の一つくらいにしか思っていなかったし、森の価値もよく解っていなかったけれど、東京から戻ってきてからは、妻に近い感情を持つようになっていた。

「この木は、お父さんが小学生のときに植えたんだよ」、「ふーん、随分大きいんだね」、「お父さんが大きくなった分だけ、この木も大きくなったんだよ」どこかで読んだ、こんな会話を子どもとするときもあった。

植樹祭や育樹祭は終わっていたが、程なく「はぐくむ」ができて、時々、子どもたちと遊びに行つて、昆虫をつかまえたり、外来種の抜き取りをししたりした。

成長した子どもたちは、部活動を始め、それぞれ森に行ってくると言つて、テニスやサッカーをしに行くようになった。夏には、家族揃つて、もりの山に花火大会を見に行くこともあったし、冬は、クロスカントリースキーを楽しんだ。



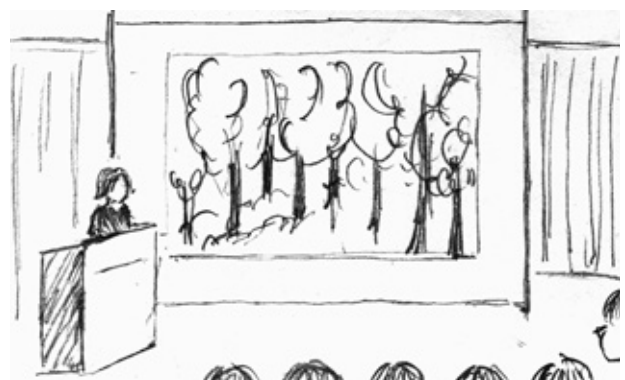
50年を迎えて

僕たちにとって、帯広の森は楽園だった。

でも、幼なじみで市役所に勤めている友人は悩んでいるようだった。今年、造成から50年を迎えるのに、この森の大切さがみんなに伝わっていないような気がする。そして、これから先どう進めていけば、本当の意味で市民の森になるのか、それを考えて、毎日、眠れないらしい。

よく話を聞くと、計画とか、ガイドラインとかは、しっかりとしたものがあるらしい。そういったものを踏まえて、これからの時代を見据えて、どういった方向性で森をつくり、使っていけばいいのか、そんなことを考えたいようだった。

僕は、自分の人生とも重ね合わせながら、友人と一緒に帯広の森のことを考えた。そして、僕の考えの一部は、彼らの考えにも反映され、友人から感謝された。僕は、これをきっかけに、より強くより深く、まるで自分の庭のように帯広の森を思うようになった。



友人は、50周年を記念して、写真コンテストやシンポジウムを企画したり、未来を担う子どもたちのために絵本をつくったりして、森の大切さを伝え、50周年の集大成として記念誌をつくり、これまで

の森の歴史とこれからの森づくりについて取りまとめた。

そして、帯広の森の認知度は少しずつ高まっていき、市民が力を合わせて50年先をみつめた森づくりが続けられていった。

50年経ったからといって、森づくりの基本が大きく変わるわけではない。造成時につくられた計画書をベースにしながら、時代の変化を踏まえて、手直しをする感じだろうか。

大きな括りとしては、10年くらい前に作られた「森づくりガイドライン」で示された、森の保全に重点を置く“原生的自然の森”、森の利用に重点を置く“散開林”、森の利用と保全を両立する“森”の3つの区分に沿って、森づくりが進められた。

具体的には、第二柏林台川沿いなど開拓前から残る自然を活かしながら、できるだけ人が手をかけずに原生的なふるさとの森の再生を目指すエリア。森の雰囲気を感じながら、便民施設なども配置して一般的な公園のように多様な利活用を目指すエリア。その中間として、双方とのつながりを意識しながら、適度に整備された森林の中で森ならではの利活用を目指すエリア。それぞれのエリアの適性に合った過ごし方をイメージしながら、森の育成・管理とハード・ソフトの整備が進められていった。

100年の森

樹木の成長は進み、今では、二世代目、三世代目への更新がみられる場所も増えてきた。自然林と人工林の区別がつかなくなっている。生い立ちを知らない観光客には、市民が苗から育てつくりあげてきた森だということはわからないだろう。今後も人為的なコントロールは必要ようだが、過度に手を加えるのではなく、森の自律的な成長を手助けするイメージだ。

帯広の森には、原生の森を復元するというコンセプトはあるものの、実際には、郷土樹種を中心にしながら、より多様性のある森になっている。

また、全てが森林になってしまうと生息しづらい動植物や虫もいるらしく、ところどころに草原的な場所が残され、景観上も良いコントラストになっている。目を見張るような大木も増え、50周年事業で植えたハルニレも、シンボルツリーの一つになっている。

森の園路は全てつながり、子ども向けやお年寄り

向け、クロカンやサイクリング向けなど様々なモデルルートが設定された。

さらには、十勝川や札内川と結ぶ「帯広環状線ルート」や緑ヶ丘公園など市街地に点在する公園や緑地を巡る「森と緑にくらすまち帯広ルート」、岩内やポロシリにつながる「国立公園ルート」など、帯広のみどりのネットワークを堪能するルートがつくられ、地元民や観光客に親しまれている。

森の園路沿いに点在しているトイレは、日陰でも発電するソーラーパネルが付けられたことで自立し、いつでも快適に使い、一部は冬も開いている。かつての農家住宅だった屋敷林跡は、それぞれ、異なる特徴を持った植物が植えられ、休憩所兼観光スポットとなっている。案内板には、帯広の森の歴史とともに、開拓の歴史や先祖が苦難の末に拓いた畑を森に返す苦悩なども書かれている。

銀世界から新緑、様々な色の花や紅葉など四季を通じて変化する景色に加え、鳥や虫の鳴き声、植物の香りやそよ風が五感を和ませる。草原でチョウやバッタを追いかけ、森林でクワガタを探す子どもたちの姿は昔も今も変わらない。野草園でみられるような貴重な草花も園路からそっと足を延ばせば見ることができる。

そういえば、園路を歩いているときに見つけたエゾリスの数だけ願いが叶うらしく、滅多に出会えないシマリスを見つけた人は、その日一日は良い事があると孫から聞いた。

僕が子どものときから、病は気からという言葉はあったが、21世紀の社会人にとっては、ストレスコントロールが最大の関心事になり、その対策として森でリラックスして過ごすことが効果的であることが広く認知された。市街地にあり利便性の高い帯広の森は好適地として有名になり、企業の福利厚生事業としての活用が進んでいる。体育施設での軽運動や農業体験などのアクティビティも組み込まれた長期滞在者向けのプログラムは、週末に訪れる観光客にも人気で、一週間を通して予約でいっぱいのようなのだ。

社会的な責任が大きい企業にとっては、従業員の確保対策と社会貢献事業をセットで考えることができるため、森づくり活動にも関わるケースが多く、森の維持・管理の助けとなっている。

森の体育施設は、施設の大規模改修や更新に合わせて、軽量・薄型のソーラーパネルと蓄電池などが

整備され、ゼロカーボンを実現するとともに、災害時の避難所になっている。これらも含め、帯広の森一体は、比較的早い段階からゼロカーボン区域となり、今では、二酸化炭素吸収量の方が排出量より多いカーボンネガティブになっている。

はぐくーむは、森の総合案内、育成管理、環境教育の場として、時代のニーズに合わせて進化しながら機能し続けている。孫夫婦の話によると、帯広市の小学校の児童は、必ず一回は、はぐくーむに行つて、帯広の森のことを学び、森づくり体験を行うようだ。いつからかはわからないが、泥んこになって好き勝手に遊ぶメニューもできて、シャワールームも整備されている。

中学生向けには、間伐と木工のカリキュラムが用意され、そこで興味を持った生徒のための限定有料メニュー「実生のトドマツでつくる生クリスマスツリー」が人気となっている。

また、50周年を機に帯広で生まれた子どもに、帯広の森の間伐材から作られたおもちゃが配られるようになり、市民が帯広の森の大切さを再認識するきっかけとなった。

生後4か月を目途に配られた丸い木のおもちゃは、赤ちゃんの歯固めとしての役割を終えた後、はぐくーむの行事で写真立てに加工し、多くの家庭で子どもの記念写真とともにリビングに置かれ、まるで、帯広市民の証のようにになっている。



加工する行事に参加した同年代の子を持つ親たちは、その場でつながりを持ち、幼児期から森遊びを体験できるイベントに定期的に参加するようになり、やがて小学生になった子どもたちは、森をフィールドに冒険遊びを楽しむようになった。

大人たちの優しい眼差しのもと、「危ない」や「汚さないで」などから解放され、気持ちの赴くままに、

枯れ枝や虫の抜け殻、水たまりやふかふかの土など森のあらゆるものをおもちゃにし、大人たちの想像を超える遊びに夢中になる子どもたち。

擦り傷や軽い捻挫は日常茶飯事だったが、目くじらを立てる親はいなく、むしろ、北欧の国々でしかできないような森や自然を体感しながら創造性や柔軟性を養えるこの一連のプログラムを目当てに、移住をしてくる若い夫婦も数多くいた。

森のレストランもオープンした。市街地にありながら360度を樹木に囲まれ、夜は星空がきれいに見える環境は稀有で、客にとってもシェフにとっても憧れの場所となり、管内で唯一の三つ星レストランに選ばれ続けている。

口コミ情報によると、道内で一番予約が取りづらい店になっているようだ。ただ、帯広市との協定により地元枠が別に用意され、市民は2年に1回くらいは、手ごろな価格で食事ができるシステムになっている。

この「もりの山」の近くには、子どもたちが遊ぶ遊具やお母さんたちに人気のカフェが設置されている。僕たちもこの後、ここで2時間くらいは過ごす予定だ。一番年下のひ孫は早く行こうとせがんでいる。帯広の森の中に遊具を置くことにためらう意見もあったが、森らしさを感じられるのであれば良いと折り合いがついたそうだ。

カフェには、十勝産の食材に加えて、森で取れたハチミツやクルミが使われたパンのほか、長年の試行錯誤の末に辿りついた芳醇な味と香りのエブタンポポコーヒーがこの店限定でメニュー化されていて人気になっている。

森のレストランでも、里山方式で伐採されたカシワやミズナラから作られたオーク樽で熟成されたワインが数量限定で提供されている。

こうした帯広の森の恵みやブランドの活用は、資源の持続性やアピール性などの観点からのルールがつくられ、企業の参入促進や管理経費の削減に効果を発揮しているようだ。

森の中には、多目的に利用できる場所も設けられた。市民が自ら決めたローカルルールの範囲である程度自由に使えるようになっている。普段は家族連れを中心とした遊び場になっていて、大きな音を出してもいい時間帯が週に数回ある。その時には、色々な年代の個人や団体がロックやジャズ、民謡など様々なジャンルのライブ演奏を披露する場となって

いる。移動式のレストランやバー、ショップも適宜営業まれ、昼夜を通して、市民が、賑わい、憩う場になっている。

もちろん、森の中で、ゆっくりのんびり過ごす人も多い。散歩がてらに森に出かけ、鳥のさえずりを聞きながら、スマートグラスに映し出されるお気に入りの本を読む人もいれば、活動団体に入って、より深く森を楽しむ人もいる。子どもが成長するように木や森も成長する。同じ日、同じ場所にいても、目に映る風景は毎年違う。森の成長や移ろいを五感で感じながら、草刈りなどの作業や林床植生などの調査に汗を流し、木の実やキノコなどの森の恵みを少しいただきながら、仲間たちと一緒にランチやおやつを楽しむ。僕も時々参加しているけど、「贅沢な休日の過ごし方だね。」が、みんなの口癖になっている。

温暖化が進むに連れて、十勝の適性作物も変化し、帯広の森を取り巻く環境も変わってきた。新たな外来種も増え、ナラ枯れ対策も必要になっている。森の管理はより複雑化しているが、活動を続けている市民団体などの英知と AI が融合し、最適解が得られやすくなった。作業道具も急速に進歩し、かなりの部分が自動化された。帯広の森に愛着を持つ市民が増えるにつれ、ゴミの不法投棄は減り、今では、大多数の市民がこの豊かな環境を未来に残すために自分ができることをしている。

10 年前に亡くなった友人に最後に会ったとき、40 年前に思い描いた森になったのかと聞くと、「おかげさまで」と頭を下げられ、「帯広の森周辺の住宅地の地価は札幌より高いようだしな。でもまだ、栄通りのオーバブリッジができてないんだよねあ」とにっこり笑っていた。

カフェでみんなで休憩しているときに、映像関係の仕事をしている孫娘が、いつか帯広の森を題材にした映画を撮りたいと語りかけてきた。

孫曰く、人工林の双壁となっている神宮の杜と帯広の森とを比べると、あっちは、国家プロジェクトとして、選りすぐりの職人と樹木を全国から集めて移植して造っていて、こっちは、素人の市民が寄せ集めの苗木を植えて試行錯誤しながら造っている。この違いは、北海道の中で官主導じゃなく依田勉三が手斧で拓いた帯広の開拓の歴史に似ていて面白い。よく言えば「挑戦」、悪く言えば「無謀」、でもこれが帯広の DNA なんじゃないか。

そして、「シビックプライド」とか、「グリーンインフラ」とか、「ウェルビーイング」とか 21 世紀のキーワードが全部詰まっている帯広の森を 100 年前に発案したなんて凄すぎる。しかも 3 票差で可決とかドラマ性もあるよね。私、頑張るから、おじいちゃん出資してと真顔で言われたので、思わず苦笑した。

映画ができるまで生きていられるかなあ。本当にできたら、天国の友人も喜ぶだろうなあ。・・・

エピローグ

「お父さん、お父さん」、「いつまで寝ているの」、「にたにた笑っていたけど大丈夫？」

妻に起こされてようやく気づいた。夢だったのか。でも、帯広の森を考えた吉村さんも夢だって、言っていたよな。

妻も実は子どもの頃から北海道に憧れていて、毎日のように自然の森の中で家族と暮らす夢を見ていたらしい。僕と結婚していなくても移住していたと後で聞き、少しがっかりしたのを思い出した。

そういえば、今の市長も「夢かなうまちおびひろ」って言っていたなあ。明日、今日見た夢の話を友人に伝えることにした。この言葉を添えて。

「お前の夢を市民が共有できれば、前に進めるんじゃないのか。そもそも帯広の森って、壮大な夢に共感した人たちに支えられて、今があるんだろ。」



はじめに

マチをぬけると森がある。

どの道を行っても十勝特有の樹々が私達を迎え入れてくれる。

そこでは、小鳥達がさえずり、虫の羽音が聞こえてくる。緑深い森の中には、広場や花園、さまざまな運動施設がほどよく配置され、記念樹林、果樹園、市民菜園などがある。市民のだれもが緑と太陽につつまれ、家族そろって楽しい一日を過ごす。

「この木は、おとうさんが小学校に入ったときに植えたんだよ。」

「ふーん、ずいぶん大きいんだね。」

「お父さんが大きくなった分だけ、この木も大きくなったのさ。」

こんな会話が聞こえてくるような……。100年後、200年後に夢をたくし、新しい歴史をつくり出す母なる森、それが私達のめざす帯広の森である。

開拓初期のオビヒロは、カシワ、ナラなどのうっそうと生い茂る原生林におおわれていた。入植した人々は、手にオノを持ち大木を切りたおし原始の沃野を畑に変えてきた。開拓は、伐採を意味したのである。やがて集落ができ町に変わり、町は、まわりの緑を食べながら急速に成長していった。こうして約 100 年、開発に明け暮れた私達がふと足をとめてまわりを見まわしたとき、豊かであったはずの緑は消えていたのである。

帯広市では、こうしたマチづくりの反省にたち、市街化区域内に適正な人口をたもち、都市施設や社会福祉施設が過不足なく配置された、まとまりある都市形成をはかるマチづくりを進めている。帯広の森は、

人間社会と自然環境の調和をはかる、マチづくり戦略の一環として構想されたものに他ならない。また「帯広の森」は、市街地で不足する大公園、緑地の補充、余暇時間の増大に対応するレクリエーション機能の整備、精神的なやすらぎ、土に親しむよろこびなど、子どもから老人にいたるまで、すべての市民の生活をうるおす、多くの機能と目的を有する大規模な緑の総合都市施設でもある。

「帯広の森」予定地は、その大半が平坦な畑であり、60 万本以上の樹木を植えなければならない、気の遠くなるような作業であり、長い時間と膨大な資金を必要とする。そしてなによりも、広大な用地の確保のために、開墾の汗を流し築き上げてきた農地を手放し、生活の転換を余儀なくされる、多くの人々の協力が必要である。帯広市開基 100 年を期して運動施設が建設され、「帯広の森」は、ようやく造成から実質的な利用へと、新しい段階に入ることになる。開拓の汗と努力の積み重ねのうえに、現在に生きる私達が、未来に残す遺産は、いま目に見えるものとなって第一段階の結実をむかえようとしているのである。

マチづくりは、一朝一夕にできるものではない。私たちは、「帯広の森」づくりを通じて痛切にこのことを感じている。遠い未来に夢を託し、2 代、3 代と続けられなければならないからである。今年もまた、市民植樹祭が開催される。緑につつまれた美しいふるさと帯広を夢みて、植えて行く、子どもも、お年寄りも……。